

利用者Cさんとの関わりの中で

渡辺 寿美子

いつからだろうか。私はCさんの笑顔を心待ちにしているようになっていた。

私は、約二年前から、グループホームで、パート従業員として勤務している。Cさんは、そのグループホームの利用者さんで、二階の一室がCさんの部屋である。Cさんは、アルツハイマー病を患っている。私が働き始めた頃、Cさんは、端正な顔立ちで、ショートカットのよく似合う老婦人であった。上下に入れ歯をはめていたが、食事も、排せつも自立され、ある程度の会話も成り立っていたように、記憶している。

二年の歳月は、否応なく病気の進行を進め、Cさんの脳は蝕まれていった。入れ歯の装着が困難になり、普通食からミキサー食へ、検温・服薬も難しくなった。昼間、居眠りが多くなり、夕方から活発に歩き回り、排せつもたびたび、介助を必要とするようになった。椅子にもたれかかり、腕組みし、焦点の合わない視線を宙に漂わせる時間も増えた。言葉もまた、ほとんど通じなくなってしまった。

Cさんは、以前、保健婦として勤務し、様々なボランティア活動に参加、趣味は木彫り、警察官の夫を持ち、子宝にも恵まれ、多くの人に慕われ、愛されていた。しかし、病は、彼女から、充実した暮らしを、まるごと奪ってしまった。現段階では、効果的な治療薬も無く、回復する見込みのない病が……

そのCさんが、いつからか、私の心を捉えて離さない存在になっていた。

私は、以前から、Cさんに、茶碗拭きを手伝ってもらっていた。洗い終わった茶碗の前にきてもらい、布巾を渡すと、自然とCさんの手は動き出した。病気の進行がかなりすすんでからも、ずっとやってもらっている。始めは、Cさんが拭き終ると、「ありがとう。」と言葉だけで、感謝の気持ちを伝えていた。そのうち、山盛りの茶碗を、嫌な顔一つ見せず、茶碗拭きに専念するCさんの姿に、私の心が動かされた。ある時、私はもっとしっかりと感謝の気持ちを伝えたい衝動にかられた。茶碗を拭き終ったCさんの手を取り、やさしく握りしめた。Cさんに、少し戸惑いの表情が

見られたが、すぐに笑顔に変わった。その笑顔は、作り物の笑顔ではなく、心の底から沁み出してきたような、そして柔らかく、私の心に沁み込んでいった。手のひらと手のひらの接触は、単に互いの体温を伝え合うだけではなく、生き物どうしが持つ、言葉を越えた何かを伝え合ったようだ。その時、殺風景だった私の心の中に、一輪の小さな花が咲いた。

その日から、私は日課のように、Cさんに茶碗拭きをお願いし、手を握りしめて
いる。

Cさんは、家族も識別できなくなってしまった。会話もほとんど成り立たない。Cさんの記憶をつかさどる海馬が故障してしまっている。当然の事ながら、週四勤、しかもたった六時間勤務の私の存在など、鉛筆の文字が消しゴムで消えて行くように、Cさんの記憶からは、抹消されていくはずと思っていた。

にもかかわらず、私は、幾たびか、例外的な出来事に遭遇した。

休み明けのある日、Cさんは、私に向かって微笑みかけ、「帰ってきてくれはったんや。」と、満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。私は心を躍らせながら、「ただいま。」と言葉を返した。

Cさんは私と目が合うと、微笑みあうようになった。何度か、微笑み交わした後、自分の席を立ち、私のそばまでやってきて、当たり前のように、私の隣の椅子に腰を下ろすCさんの姿に出会った。また、内容はなかなか理解しづらいのであるが、私に「かわいいむすめが……。」「きてくれはってな……。」「あそこのおばあさんが……。」目を輝かせながら、笑みを浮かべながら、語ってくれるCさんにも出会った。やさしいトーンでCさんの口から発せられる「ありがとう」を何度も耳にした。Cさんからの、これらの思いがけないプレゼントは、手を握りしめたあの日から届くようになり、私の心に、やわらかい色の花を咲かせていった。

グループホームで勤務中、他の職員から利用者さんに対して、強い口調で発せられる言葉を聞くとときがあった。「何回いわれたら、わかるの?」「何してんのや!」利用者さんは、全員、多少度合は違うが、認知症を患っておられる。うまく理解できる時もあると思うが、幾度同じ注意を受けても、頭から消えてしまう時もある。言われた利用者さんは、厳しい言葉を投げつけられた事は、わかる。顔が苦しく歪んでしまう。その悲しい表情から、私は傷ついた心を思い、暗い気持ちになってしまふ。実際は、利用者さん全員が、わたしたちより年配である。ここに入所するま

で、長い人生の歴史を歩いてきた。ほとんどの人が、戦時中を乗り越え、生き抜いて来られた。楽しいこともあっただろうが、つらいことも、悲しいことも何回となく、経験したことだろう。そんな人生の大先輩の、お世話をさせてもらっているのは、私たちの方である。言われた利用者さんの沈んだ心をなんとか、押し上げてあげられないかと思うが、なかなか、いい言葉が見つからず、部屋全体の暗くなった空気に、押しつぶされそうになる。


そんな時こそ、Cさんに柔らかく微笑まされると、私は、マイナスに傾きかけた心から、一気に立ち直れる。やさしい言葉が心に浮かび、自然とその言葉を発していたりする。柔らかい言葉は、厳しい言葉と同じように、利用者さんの心に届く。しかも有難いことに、認知症は負の記憶をも消し去ってくれる。しかめていた顔が普通に戻り、口元が緩み、微笑みさえ浮かぶときもある。

Cさんが持ち続けていることがある。暮らしの中で、身につけてきたのであろうか。自分よりも、相手を大事にしようとする態度である。私が席にすわるようにすすめても、まず、私の座る席があることを確認する。自分の席しか見当たらない時は、自分の席を私に譲ろうとする。食事にしても、私のテーブルの前に、何もおかれていなければ、Cさんの前に用意されているごはんやおかずを私の方に移動させようとする。その姿に、自分の事を最優先にすることの多い私は、じんわりと感動する。

もう一つ、これは介護者にとっては困ることなのだか、Cさんは時々、介助を拒絶する。洗面・更衣・食事・排泄・・・介助しようとする私たちの手を払いのけ、決して私たちの思うようには、させてもらえない。介護者にとっては、厄介ではあるが、彼女は自分の意志を示し、立派に自己主張しているのであろう。

確かにアルツハイマー病は、Cさんの脳を蝕んでいった。だが、人を思いやる心・感謝の気持ち・笑顔・自己主張といった人間の重要な資質までは、奪い去ることはできなかった。私はCさんの中に、人間の尊厳を見出し、幾度心を打たれたことであらう。

私は、母親が高齢になり、病を何重にも抱え、心身共に不自由になってからも、住まいが離れていることを理由に、そばにいて、十分に世話してあげることができなかった。できないまま、母は他界してしまった。その悔しかった思いが、私に、高齢者の世話をする仕事を選択させた。



当初、私は「お世話してあげる。」という一方的な援助の目線で利用者さんと接していたように思う。世話をする側、される側は、人の位置を上下に置いてしまう。私に『誰もかれも、みんな同じ人間なのだよ。』と教えてくれたのは、Cさんだった。私が家庭のごたごたを引きずって勤務し、意気消沈している時でも、私を励まし、私の気持ちを支えてくれたのは、Cさんの幼な子のような愛らしい笑顔だった。時が経つにつれ、私の中でCさんの存在は、どんどん大きくなっていく。いつの間にか、職場が学びの場と感じられるようになった。Cさんの笑顔に会えると思うだけで、気持ちが上向く。どうやら、私はお世話する側ではなく、お世話される側に変わってしまったようだ。